

## 『考え、議論する道徳』への挑戦

附属小の教室の特徴の1つに、子どもたち一人一人の机の前面に「ネームプレート」がついてることがあげられます。各学級担任の先生の個性で作成されていますが、以前は男の子が青、女の子が桃色で、紙は「表紙紙(ひょうしがみ)」という独特の厚紙を校内の売店さんから購入しほとんど全学級で様式を揃えて作成していたように記憶しています。

この名札、実は授業で大活躍します。

その代表が道徳の授業での「価値の類型化」でした。例えば「星野君の二塁打」。同点の最終回、星野君は監督の「送りバント」のサインを無視して思いっきりバットを振り抜きます。結果は二塁打。その後チームは見事に勝利をおさめます。この星野君の取った行動について「賛成」か「反対」で黒板にネームプレートで自分の考えを明示させ、話し合いに移る手法です。資料から「共通の問題」を設定し、葛藤資料では行動面から、心情資料では心情面から子どもたちの考えを整理します。そこからさらに、「共感させる発問」「切り返しの発問」「焦点化を図る発問」で子ども同士の考えを広げさせ深めさせていきます。

かつて本校道徳部では「自己をみつめ価値を内面化させるための指導のあり方」に焦点をあて、以上のような手法も取り入れながら指導過程の基本構想を作成しています。

【子供が確かに分かるためのよい授業の探究と創造 1991研究紀要 参照】

そういう意味では、過去の研究の中に改めて現代の授業づくりに通じるヒントがあることに驚かされます。

平成30年4月から道徳の教科化がスタートします。道徳的価値を自分事として理解し、多面的・多角的に深く考えたり、議論したりすることが求められます。

今年度「出前授業」で要請が一番多かったのも「道徳」です。今回の出前授業では、道徳の要請が多かったために、孝徳先生と玉手先生だけでは負担が大きくなるので、授業者を道徳部でない先生方にも求めました。早速川名先生、黒田先生、三浦先生が手を挙げてくれたそうです。三人の姿勢には心から敬意を表したいと思います。道徳の出前授業には賛否両論あることと思います。なぜなら本来「道徳の時間」の授業は担任が行うべきことだからです。でも、そのことは承知の上です。「今回の改訂の趣旨や評価について」の講話だけなら附属小の先生でなくても十分です。私たちができることはやはり目の前の子どもと「授業で勝負すること」です。

仙台市内の小学校で授業に挑戦した黒田先生、大崎市内の小学校で授業に挑戦した川名先生からは初めての子どもたちと授業を行うので緊張したが道徳の授業づくりについて学ぶことが多かった、という感想を聞かせてもらいました。また、孝徳先生からは訪問した学校の6年生の子どもたちの姿にとっても感心しました、というお話も聞かせていただきました。ご協力いただいた先生方、雪の中本当にありがとうございました。

(文責：副校長 手代木)